

私は医学を専門としている。いつの間にかやらオペラの虜となり、これまでに見たオペラの数も200近くまでになった。今では、その鑑賞記録をパソコンに蓄積して、歌手と役柄や演出家による違いなどを分析して大いに楽しんでいる。オペラ・オペレッタにはいろいろなものがあるが、やはり楽しい舞台を観たあとは気分がいい。中でも上質のオペレッタは何度観ても楽しい。こうした楽しい気分になったり、笑ったりすることが、ストレスを解消し、免疫力を高めて健康にもいいことは医学的にも証明されている。

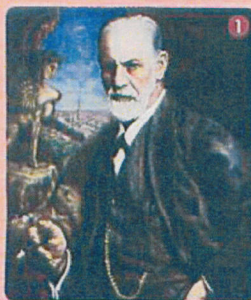
今日の『メリー・ウィドー』は、『こうもり』と並んで、私の最も好きなウィンナ・オペレッタである。ウィーンでは19世紀末から20世紀初めまで、こうした楽しいオペラが多数作られ、もてはやされたが、その繁栄ぶりは時代背景が大いに関係したのであろう。当時、ウィーンはオーストリア＝ハンガリー帝国の首都として、ハプスブルグ家のお膝元であり、〈世紀末文化〉といわれる独特の文化が栄えた。レハールと並び画家のグスタフ・クリムトやエゴン・シーレ、作曲家のグスタフ・マーラー②やアーノルト・シェーンベルク、精神分析のジークムント・フロイト①など名を馳せた面々は、皆が同時代にウィーンで活躍した文化人である。マーラーは晩年フロイトに診察を受けていたといわれている。医学者としては胃がんな手術に初めて成功し、今でも胃の手術に使われているビルロート法③④の発案者として著名なテオドール・ビルロートも当時ウィーン大学で教鞭をとっており、ブラムスと親交が深かった。

この頃ヨーロッパ周辺では戦争もあったが、ウィーンはそれなりに平和だった。その文化土壌が楽しい舞台作品を育んだのだろう。

ところで、そのウィーン文化の一つとして楽しいオペラやオペレッタには恋の駆け引きの手段で〈登場人物の入れ替わり〉が非常に効果的なことに気付く。例えば『メリー・ウィドー』では主人公のハンナがヴァランシェンヌと入れ替わるし、『こうもり』でも〈入れ替わり〉がふんだんに提供されている。また、遡ってウィーン先輩モーツァルトの『フィガロの結婚』『コジ・ファン・トゥッテ⑤』『ドン・ジョヴァンニ』にも、同じように人物が〈入れ替わり〉、浮気を暴いたり、うまく逃げおこせる場面がある。予め観客は分っているにも拘らず、舞台の歌手の〈入れ替わり〉に全く気付かぬさまが皆の笑いを誘う。さらに〈入れ替わり〉は後輩のリヒャルト・シュトラウス⑥でもウィーンを舞台にした作品に多く見られる。こうした脈々としたウィーン気風に着眼するのは、遺伝因子にも配慮する医学者の性だけではなからう。

職業柄、もう一つ気になるのは、劇中の医師である。医師が登場したとしても『ラ・トラヴィアータ(椿姫)』終幕のグランヴィルのように、ただ「ご臨終です」というだけで、主役とは言えないのが多い。

しかし、前出『コジ・』に出てくるデスピーナが扮する偽医師は実に傑作な医師である。アルバニア人に化けた恋人が、恋が成就しないために毒を飲んで自殺するふり



19..Billrothstraße

① Sigmund Freud 1856-1939 画: "Sigmund Freud with Sphinx", フロイトとスフィンクス, 2005 oil on linen, 油彩 リネン, 82×65cm Copyright Setsuko Aihara, コピーライト (著作権) 画家: 相原節子 ② Gustav Mahler 1860-1911 画: Gustav Mahler (Das Lied von der Erde) : グスタフ・マーラー(大地の歌), 2006 oil on linen, 油彩 リネン, 82×65cm Copyright Setsuko Aihara, コピーライト (著作権) 画家: 相原節子 ③④ 相原節子 (画家): 日本で生まれ育ち、国際キリスト教大学(国際政治)卒業後、アメリカに渡り、30代半ばで、美的創造的生き方を目指す実存的決意に基づき、ホノルル及び、ホストンで芸術、教育活動に従事。現在は、オーストリアのウィーンとアイルランドにて創作活動を行う。近年は、音楽の感動に基づくウィーン・プロジェクトを含めて、同様に心理の深層から、制作した偉大な芸術家を讃えて記念する記念肖像画も制作。この展示には、フロイト、マーラー、シェーンベルクの記念肖像画も含まれる。⑤ テオドール・ビルロート (Theodor Billroth 1829-94) ⑥ ウィーンにあるビルロート通りのプレート ⑦ 2006年二期会公演「コジ・ファン・トゥッテ」 スピーナ (中央) 扮する医師 (橋本絵里), 左: フェランド (鈴木直), フィオルディリーネ (林正子), 右: ドラペッラ (山下敦子), グリエルモ (宮本益弘) 演出: 宮本雅門 衣裳: 前田文子 撮影: 野山英次 ⑧ 2008年びわ湖ホール、神奈川県民ホール、東京二期会共同制作「ばらの騎士」 第1幕 元帥夫人はオックス男爵の突然の訪問に愛人オクタヴィアンを小間使いマリアンデルとして変装させる。演出: アントニアス・ホモキ 写真提供: びわ湖ホール ⑨ フランツ・メスメル (Franz Anton Mesmer 1734-1815) ⑩ 1985年二期会公演「ウォツェック」 ウォツェック (中央: 大島渥雄) 医師 (右: 多田輝樹夫) 演出: 佐藤信 撮影: 野山英次 ⑪ カール・グー・ブヒナー (Karl Georg Büchner 1813-37)



開原成允(かいはらしげこ) 1961年東京大学医学部卒。内科学を専攻。83年東京大学教授。東大退官後、国立大蔵病院長、現在国際医療福祉大学副学長。86年国際医療情報学連盟会長。著書に「患者の声を医療に生かす」医学書院など。

をすると、偽医者が大きな磁石を持って出てきて生き返らせる。この場面なぜ磁石を持って出てくるのか不思議に思われる方もあると思うが、これは当時のウィーンにアントン・メスメル⑦という一世を風靡した「磁気療法」を行う医師が実際に存在したからである。磁気療法というのは、人の病気は磁気不足のために発症すると考えて、暗い部屋の中で患者に鉄棒を持たせ磁気を補給する暗示をかける。この治療法は今からは、いかがわしい治療法といえるが、当時は非常に人気があった。現在一種の催眠療法と考えられ、催眠術をメスメリズムということもある。

さらにウィーンの作曲家アルバン・ベルク『ヴォツェック⑧』中の医師もある。この医師は哀れな主人公ヴォツェックを実験台に使い彼にそら豆以外のものを食べることを禁じ、偏食が精神異常をもたらすことを証明しようとする。今の医学界ではこのような乱暴な人体実験を行うことはないから安心していただきたいが、『ヴォツェック』の戯曲が書かれた20世紀初頭、まだこうしたことが実際に行われていたのだ。因みに、この台本を書いたゲオルク・ビュヒナー⑨は医学者でもあったので、それ

だけに私は大変気になるのである。

さて、楽しいオペレッタから話が暗くなったが、その後、暗いオペラが創作されるのも時代の色濃い影響であると思う。第一次世界大戦が勃発、オーストリア＝ハンガリー帝国はハプスブルク家と共に崩壊。第一次世界大戦後にウィーンにもナチズムが台頭してくるからだ。

『メリー・ウィドー』を作曲したレハールも、その時代から逃れることはできない。夫人がユダヤ人である故に、オーストリアを併合したナチスから無縁ではいられず、弾圧を受ける。しかしヒトラーはレハール作品を好み、幸運にも夫人はアウシュヴィッツ行きを免れたが、彼のオペレッタの台本を書いたユダヤ人作家たちを救うことはできなかった。このためか、以降彼は戦後まで生きていたがオペレッタを全く書かなくなった。時代と共に、ウィンナ・オペレッタの黄金時代は終焉し、二度とこのような楽しいオペレッタは生まれなかった。

21世紀になった現代、できればまた楽しいオペレッタがたくさん作られ、また上演される時代になってほしい。皆がそれを観て楽しい気持ちになれば、健康にもなり、現在の困難な世の中で生きていく元気も湧いてくるであろう。

その意味で、今回の二期会『メリー・ウィドー』公演に大きな期待を持っている。

(国際医療福祉大学 副学長) 開原成允

健康にこそオペラ。
 水。ペレグロの地盤とメスメリズム。
 ギョットとメスメリズムの幽霊。
 幽霊の監督

